



発行日：平成 26 年 9 月
編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第 21 回海部会WGを開催しました！

9月5日に第21回海部会WGを開催しました。鳥類からみる海の調査を実施した後、調査の振り返りと干潟観察会の結果や次回の活動などについて話し合いました。

日時：H26年9月5日(金) 10:00～14:00
活動場所：衣崎漁港、矢作古川河口部周辺
西尾市役所一色支所1F 第4会議室
参加者：13名(事務局含む)



◆主な会議内容

1：衣崎漁港、矢作古川河口で鳥類観察を行いました。



西三河野鳥の会の高橋さんにアドバイスを受けながら衣崎漁港周辺の海岸でシギやチドリなどが地球的規模での渡りの中継地として干潟を利用している状況等を観察しました。

<高橋氏の説明>

- ・シベリアの淡水の環境で育った渡り鳥にとっては、干潟と共に後背地である水田や淡水湿地が必要である。
- ・しかし後背地は、産業廃棄物で埋め立てられたり、太陽光パネルの設置場所などに環境が変わっている。
- ・三河湾の後背地では、塩田跡のような広大な淡水湿地の環境が残っていたことが幸いし、野鳥にとって好ましい環境であったが、人間にとっては開発等の適地とみなされたきらいがある。
- ・また、春と秋の渡りの時期は、田んぼのしろかきとイネ刈りの季節に重なり、渡り鳥にとって最適な環境であったが、近年は隔年で麦と大豆の転作が行われており、餌となる水生生物や土壌生物が消滅した。
- ・満潮で干潟が姿を消したときの後背地として適した場所が無くなり、水鳥の飛来は激減している。
- ・川からの砂の供給が減ったことと、後背地の埋め立てや乾燥化により、野鳥が減ったものと考えられる。
- ・第一次産業の衰退問題や環境問題など、野鳥を見ていると人間社会の負の部分が目の当たりに見えてくる。
- ・シギ類は種毎に水田や干潟で様々な餌を食べている。どちらの環境でも生息する種は激減しているが、水田などの淡水湿地に生息する種はほぼ絶滅状態であり、干潟に生息する種が僅かに残っている程度である。
- ・セイタカシギは絶滅危惧種だが、ここ衣崎漁港付近では繁殖している。底生生物を食べ、あまり遠くまで移動をしない。ドロドロの泥質で一見汚くみえる環境も、生き物たちにとっては極めて貴重な場所である。



望遠鏡で鳥を観察



渡り鳥等が休息・補食する干潟の状況



水際に休憩するセイタカシギと埋立て等が進んだ後背地の状況



セイタカシギが繁殖した環境

2：話し合いで決まったこと



■鳥類からみる海の調査について

- ・干潟と後背地の土地利用のあり方を一体的に考えることの重要性を確認・共有した。

■干潟観察会について

- ・親や先生の環境意識の向上や海へのアクセスの充実、人を集める工夫や知恵が必要。

■次回について

- ・愛知県の取組と連携し、ゴミ・流木調査とアンケート調査の両方を実施する方向で検討する。

◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西 1-6 国土交通省豊橋河川事務所 事業対策官 西原、建設専門官 真柄
TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8100



◆話し合いでの主な意見

(・意見・感想 ▶回答)

■ 鳥類からみる海の調査の感想について

- 今日はダイシャクシギやアオアシシギ、シロチドリ、ウミネコ、キアシシギなどを観察できた。10年前は20~30種類はいた。(高橋)
- 20年前に一色干潟の水質浄化の調査をした時は鳥がたくさんいたが、今日は少なく感じた。干潟の後背地の土地利用が大切であり、水質も人から見れば汚れたが生き物から見れば豊かさになるという違いがわかった。干潟については、鳥の話が一つの大きな柱になるのではない。(鈴木)
- カワウもいたが、各地で増えすぎて漁業や生態系に影響が出ている。一つの種を大事にしすぎてはいけぬ。(高橋)
- 三河湾の干潟が豊かなのは、陸側から入ってくる栄養素が非常に多いから。アサリが多いのもそのためだが、鳥の役割も重要になる。鳥は干潟の有機物を間引いて他の場所に持って行ってくれる。それにより干潟は豊かな状態に保たれる。漁業者なども同じで、干潟の生き物をとりあげることが重要なこと。単に自然保護ということではなく、干潟を守っていくためにも、鳥の来遊を担保するための後背地の土地利用対策や研究の継続が必要。(鈴木)
- 独立行政法人港湾空港技術研究所の桑江氏が干潟に飛来するシギが潮が満ちてくるとバイオフィル(微生物)を食べていることを発見した。とにかく多様な環境がないと生き物も生きていけない。人が入り攪乱することも大切。(高橋)
- 最近の中学生は教育はされているが、鳥が何を食べているなどの生態系の複雑なやりとりを肌で実感できていない。さらに川や海で遊ぶ体験がなくなり、あげくの果てに危ないからやめろという話になる。(鈴木)
- 昔から人は、沖合の鳥の群れを見てカツオやマグロの居場所を探してきた。また、兎島では、兎や猿、人がいなくなり、サギばかりになって糞害で木が枯れ巣をつくっていたクジャクもいなくなった。人と鳥の接点は多いがよいことばかりでなく難しい。(石川)
- 愛知県は一日中田畑に陽が当たり、農業をするには最高の場所であり海外にも誇れる。大きな話になるが、漁業、農業と工業が同時に成り立つような社会構造にすることが流域圏としての課題。(高橋)
- 以前、三河に来たオランダの干潟研究者を案内したが、対岸が見えるような海で、のりや貝、鳥などがたくさんいることに驚いていた。地元の間は当たり前と思い豊かさに気づかず、埋立て駐車場にしている。愛知県は自動車産業で儲けているが、節操がない。生物的にも多様、産業的にも多様。それがバランスできるしくみを模索したい。どこかに資源が偏るといけない。鳥はその面でわかりやすいメルクマール。鳥をみていると海の変化、土地の変化がよくわかる。(鈴木)
- 地元が地元を知らなさすぎる。こんなによい環境、干潟があるのに、子どもたちも空気のように見ようとしぬ。(石川)
- 私が育った長良川の流域圏の山の中では夏の間に少し日が差すくらいだが、矢作川の流域圏は谷も浅くどこでも住める。ここで農業漁業が成立しなければ、世界中どこでも成立しぬ。昔海苔養殖をしていた家内の友人の家で山盛りの黒いびかひかの海苔をお茶請けに出された時は、山で食べていた青い海苔とあまりの違いに感動した。(高橋)
- 日本中の海を歩いたが三河湾のように豊かな海はない。だから余計、壊れていくのを見るのがしのびぬ。(鈴木)
- これだけ地元が知らないということもぬ。(石川)
- 昔は鶏の糞は肥料として売れた。本来鳥はそういう役割をしなければならないが、人間がうまく関係して利用するのが一番理想だと思う。(高橋)



■ 干潟観察会の結果について

- 8月9日と12日で親と子の割合に違いはあったか。(青木)
- ▶ 両日とも親と子は半々だった。(西崎)
- 三河湾の水のきれいさは、見る場所によって印象が変わったかもしれない。(石川)
- 普段海に行かない理由として「距離が離れている」という意見が多いが、実際はどうか。(青木)
- ▶ 海沿いの名鉄三河線が一部廃線になってから交通手段が減った。学校から駅まで遠いため、バスで送迎している。(石川)
- 豊田の西広瀬小学校の参加者が少なく残念だった。(石川)
- 西広瀬小の子どもたちは8月20日に安城でピオトープの取組の発表していたので、夏休みは忙しかったかもしれない。元から矢作川の水質を測るなど環境意識は高いので、偶然だと思う。(平若)
- 学校の先生の意識が高いのだろう。水産高校が小中学校の教員を対象に環境教育をしているが、リピーターが多く新規が少ない。(鈴木)
- お母さんがマテ貝を気持ち悪がって触れない。アサリと違いマテ貝は入場料を捕らないので、リピーターが増えてきている。(石川)
- 食べさせたら良いと思うが。(鈴木)
- ▶ 持ち帰る人やバーベキューする人もいる。愛知県産の大アサリも食べた。(石川)
- ▶ アカエイはエイヒレを食べられる。(高橋)
- 食べないから生き物が増える。食べることも大切。食べると子どもの関心も上がる。(鈴木)
- 三河湾大感謝祭のようなイベントは都会の人には良いチャンス。(鈴木)
- 海に行かないのは距離だけの問題ではない。行った先に楽しみが必要。(青木)
- 海辺に車をとめるところがない。海へのアクセスのための駐車場や階段の他、海の駅などの飲食できる場所があればよい。また、水辺に人を集める工夫が必要。師崎漁港の朝一は10年続いている。そのくらいのスパンで取り組む必要がある。後継者がいないため、潮干狩りできる場所も全国で減っている。三河湾で漁業と環境産業の成功事例をつくれぬだろうか。(鈴木)

■ 次回WGについて

- 流域圏メンバーの昼食はどうするか(国立)
- ▶ 弁当サロンで会議ができれば弁当も一緒に頼みたい(西原)
- 何人くらいどんな人がくるのか(青木)
- ▶ 定員は50人。環境意識の高い親が子どもを連れてくる。(国立)
- アンケートは東幡豆と同じ内容を考えている。(西原)
- 流木調査の際は、流域圏メンバーが参加者に声掛けや助言をお願いした。(国立)
- 流木調査とアンケート調査を両方してはどうか。(青木)
- アンケートは参加者の負担にならないように工夫したい(国立)
- 設問数をなるべく少なくして愛知県のアンケートと合体させてはどうか(青木)

ふりかえり

会議後にご記入いただいた、ふりかえりシートの内容の一部をご紹介します。



鳥類観察を通じた感想等：鳥類と干潟との関係がよくわかった。／鳥にとっては干潟だけでなく、後背地も大切なことがわかり勉強になった。／干潟と鳥の関係の後背地の問題を含めて広く認識できた。／干潟と鳥と後背地の土地利用が関係していることを教えてもらいとても参考になった。／鳥類の生態と開発について考える機会となった。／鳥類を観察することで干潟等の環境の変化や後背地の重要性がわかった。／海と陸(鳥)との関係がわかりよくなった。／鳥を通して視野が広がった。／意外と遠くに鳥がいたのもっと専門的な望遠鏡が必要だが、高橋氏のものでよく見る事ができた。／鳥を通じた干潟等の話は、別の機会でも勉強会があるとよい。

その他：今までの取り組みを継続していきたい。／ダムでの堆砂を使った干潟造成の話が一步進みよかった。

今後のスケジュール(予定)



次回 第22回海部会WGを10月11日(土)に開催します

佐久島で行われる愛知県海岸漂着物環境調査に参加し、振り返りを行います。

